

『胡琴教録』真名本の伝来

— 岩瀬文庫蔵本をめぐって —

木林 下 西女 弘伯

はじめに

中原有安の言談を集成した琵琶作法書『胡琴教録』の伝本の中でとりわけ重要なものは、「猪熊本」と呼ばれる真名宣命書本である。上巻を失った下巻のみの残欠本であるが、その書写は鎌倉期に遡り、また『胡琴教録』の本来の形態に近いものと推定されるからである。ここに紹介する岩瀬文庫所蔵『胡琴教録』(以下「岩瀬本」と略)は、その猪熊本と同種の真名本であり、その表記形式もさることながら、その他の点においても実に興味深い事実を教えてくれる一本である。

まず書誌について記す。猪熊本と同様に下巻のみ一冊の残欠本。若干の虫損があるものの総じて良好な保存状態である。猪熊本が卷子本であるのに対して、これは袋綴装。法量は縦二七・〇釐、横二〇・〇釐、料紙は楮紙で、すべて三十九丁。本文は一面八行、各行十八字前後の墨書真名書であるが、全冊にわたって比較的詳細な朱

注が施されている。外題は、斐紙の表紙に「胡琴教録」と打付に墨書。見返しには「下巻斗世傳今出川家当同道也」と記され、続いて遊紙なく一丁表に内題がある。内題は墨書「胡琴教録」の下に朱書「下」と記されている。後述するように朱書は他本との異同を示している。この本書の親本には単に「胡琴教録」とのみ記されており、比較された他本の内題に「胡琴教録下」と記されていたものと知られる。

なお内題に続けて各篇名が列記されており、見返しの注記と内題を除けば、ここまでは猪熊本と同内容である。ただし岩瀬本は、先掲内題及び個々の談話の冒頭行頭に朱で△印が付されており、猪熊本との著しい差異を示す。また墨書本文はおよそ猪熊本に近いが、ときに微差を示すところがある。

一、奥書について

本奥書は猪熊本・岩瀬本ともないが、岩瀬本末尾には書写奥書が記されているので、ここに引用しておく。

此本者以田中殿御蔵書寫之、且公久卿

傳來之卷物借得、令校合以朱

傍註了

文政九年仲呂十六日 (花押)

(読点は私に施した。以下同じ)

奥書に言うところは、およそ次のようにまとめられる。

1、岩瀬本の親本は、「田中殿御蔵書」であること。

2、「公久卿傳來之巻物」をもって校合し、それを朱の傍註で示していること。

その書きぶりから、書写・校合・奥書が同一人の手になるらしいことがわかる。親本は「田中殿御蔵書」というが、「田中殿」について詳細は分らない。すでに若干述べたように、この「田中殿御蔵書」は猪熊本とは別の伝本であろう。また朱注は「公久卿」所蔵の「巻物」によつた異同の注記であるとされている。当面の検討は、この朱注に向けられるべきであろう。検討の前にまず述べておけば、墨書の本文と朱書の注記とはともに同一の筆跡であり、この点、書写奥書の記述と齟齬しない。

ところで岩瀬本の親本となつた「田中殿御蔵書」では、猪熊本に存する裏書が巻末にまとめて記されていたらしく、岩瀬本もまた巻末に墨書で、裏書をまとめて記している。その末尾に次のような朱注が施されている。

以上今出川家書不覽、但押裏紙アリ、
其条々ニアリ則印了、

この他にも墨書裏書の行間には「以下今出川家比巴彈時古質ニウラニ押テアリ」(「比巴彈時古質」は『胡琴教録』の篇名)のような注記が散見する。また本文が始まる「二丁表には「裏張紙」に始まる詳細な朱による首書が見え、他にもまま散見するので、朱書の内容は、奥書に言う単なる異同注記だけでないことがわかる。以下、朱書の

中身をいわゆる異同注記とその他の首書・頭注等の類に分けて検討してゆく。

二、朱書について(その一)——異同注記

異同注記を示す朱書について、まず検討する。検討に当たつて、猪熊本本文と比較しつつ考察すべきことは、言うまでもない。

異同注記の實際をいくつか挙例する。始めに述べれば、異同注記の實際は、比校のうえ校訂するか、欠脱を補うかのいずれかである。なお紙面の都合上、校訂注記は墨書本文該当箇所に傍線を付し直後に()で朱注を示す。補入については、補入符等は省略し、補入された朱による文字・文等を「」で括つて墨書本文に挿入した。また私に読点を施した。

・ 予彈比巴、我(或)僧吹笛

(八丁表六行目)

「我」字を「或」と直している。猪熊本もこれに同じである。朱による異同注記の多くは、この部分のように墨書本文を訂正し、猪熊本に一致する。

・ 癡志(癡忘)之由乎「稱」志旦」

(九丁裏四行目)

「癡忘」の部分については前の例と同様である。次の「稱」字の補入は、墨書本文では空欄になっているところに、朱字を埋め込んだ形で記されている。親本でも空欄となつていたのであるうか。いずれにしても、この書き入れについても猪熊本と一致する。ただ「稱」字傍らの朱「本ノマ、」は猪熊本にはない。この部分について猪熊本

を見ると、「稱」字の字形が崩れ、やや読みにくくなっている。岩瀬本は猪熊本のやや崩れた字形を、確実に読み取れないままに写し取ろうとしているようである。校合の際のこうした傾向は、次のような例にもっとも顕著に現れよう。

・ 件條、且不被不被秘義也 (十一丁裏六行目)

墨書本文「不被」を「不被」と改めようとしているわけだが、「不被」では意味が通じない。もとの「不被」のほうが通りがよいのである。猪熊本を見ると、やはり「不被」となっているが、その字体に問題があるようである。猪熊本ではこの部分が次のようになっている。

件條且不被不被秘義也

つまり一見すると確かに「不被」とも読めそうなこの「不被」字を、岩瀬本はそのまま「不被」と読み取り、写し取っているのである。ある意味では忠実な校合であり、また別の意味においては機械的の非りを受けようが、こうした部分によって岩瀬本と猪熊本との近縁さが確認されると思う。

これと同じく岩瀬本朱書異同注記と猪熊本とが一致しない例はほかにもある。例えば次のようである。

・ 観止有有、仍其音等也、玄十叶叶

(三十四丁表四、五行目)

この部分、猪熊本と岩瀬本墨書本文とが一致しながら朱によって

抹消され、「此文ナシ」と朱傍書されている。こうした部分が説明しにくいのが、猪熊本ではこの抹消箇所がほぼ一行分に当たると。また抹消箇所の前直前は、この抹消箇所末尾と同じく真名割書である。右に見た、やや機械的な校合態度をも勘案すれば、恐らくは似通った表記がごく近似した場所に並ぶことによって目移りし、一行分をまるまる飛ばしたのではないかと。あるいは対校された本では、この部分が欠落していたのかもしれない。そう思わせるほどに、岩瀬本の校合は忠実かつ機械的なのである。

以上、異同注記のいくつかを取り立てて解説するにとどめておくけれども、右の例外を除き、ほとんどの注記が猪熊本本文に一致することを確認できる。

三、朱書について(その二) — 首書

次に、朱による首書の検討に移る。まず二丁表五行目より同八行目に至る首書を掲げておく。は行移りを示し、改行はそのままに残した。

裏張紙／追註愚案／先前日調比巴／置之、第二日／三日其音殊／美也、

／又有音勢、第／四五日以後、還無／句無音勢、

／又云、若懸切／絃、又結續之／時、雖仁、時必／可挿拔於／

陰月、不然／者、若有失事歟、

始めに述べておけば、この部分は、本書巻末にまとめて墨書され

る猪熊本裏書にほぼ同じである。また首書が施される位置は、猪熊本裏書の位置にほぼ相当する。卷末墨書とのおもな相違は次の三点である。

1、いずれの改行部分も、改行直後の行頭には合点が付されて
いる。

2、首書の始めの改行部分(傍線「美也」の部分)が、卷末墨書で
は改行せず、一続きに記されている。

3、引用末尾傍線部は、卷末墨書では「有落失事」となっている。
まず1及び2について述べる。この二点から、岩瀬本首書のこの

部分における改行意識は極めて強くと考えられる。首書に合点が施されるのは二丁表の部分のみだが、それはこの部分に首書が集中しており、個々の裏書が紛れないようにするための配慮である。同様に猪熊本裏書を写した首書は、このほかにも五箇所存するが、いずれもほかの首書と紛れようもなく離れた位置にある。その場合は合点が付されていないのである。すると問題の部分は、やはりかなり意識的な改行と考えなければならぬ。しかし意味の上から言えば、当然一続きのほうを通りがよく、無用な改行である。猪熊本裏書を参照すると、岩瀬本の改行部分でちょうど行が移っており、岩瀬本首書はこれを機械的に写し取ったものと推定されるのである。

このほかの首書の内容も述べれば、いずれも基本的に卷末墨書に一致し、また記される位置は猪熊本に同じである。また卷末墨書には、先にも述べたように「以上、今出川家書不覽、但押裏紙アリ」の

注記があった。加えて奥書には、岩瀬本が「公久卿傳來之巻物」と校合された旨が記されていた。とすれば、「今出川家書」と「公久卿傳來之巻物」とは同一の本であり、問題の人物は今出川尚季息、正二位中納言公久とわかる。

山田孝雄氏によれば、この猪熊本裏書は「元來本書(森下注、猪熊本)と同筆たるものと思はるれど、原本の裏打ありて不明瞭となりたるを以て、後人の別紙に模寫して、元の裏書の部分に貼せるもの」²⁾であると言う。その結果、長文の裏書を写しきれず、省略したらしい箇所も見られる。猪熊本から引用する。

筆紋懸事

先太緒ハツシテ能ク是ヲノコフ³⁾

群書類従所収本によれば、この条はかなり長文の裏書であったことがわかるが、右の「已下」は、一条がさらに続いてゆくことを示しているであろう。岩瀬本首書(二十七丁表五行目)はこうした部分も猪熊本と同様である。しかも山田氏の言葉に明らかのように、「裏書」は単純な裏書でなく、別紙を貼付したものである。これは岩瀬本が伝える「今出川家書」の「押裏紙」という説明に一致しよう。従って、岩瀬本が参照した今出川家傳來の巻物は、猪熊本と同一の伝本、もしくは猪熊本を忠実に復元した複製本であると推定できるのではないか。先の首書と卷末墨書との相違点3にあげた「落」字の有無は、首書を写し取る段階で生じた単純な脱字と見て差し支えあるまい。

おわりに

かくして、岩瀬本が参照した「今出川家書」という「巻物」が、猪熊本に極めて近いことが確認されたと思う。従来、猪熊本の伝来については、ほとんど述べられることがなかったが、恐らくは今出川家と深い関わりを持ち、猪熊本そのものかその忠実な複製本が公久の時に岩瀬本の校合に供されたものと見て間違いない。猪熊本は今出川家と深く関わる伝本であった。またこの岩瀬本によって、近世において猪熊本からの派生本ではあるが、複数の真名本が伝流していたことが知られるのである。この事實は、仮名書本伝本いくつかの下巻部分に、真名本の本文形態に近い（すなわち仮名本文に漢字を宛ててゆく形で）書き入れを有する場合があることも関わっていよう。真名本は、決して他の世界から隔離された伝存経緯をたどったわけではないのである。この意味においても、墨書本文自体は原態から隔たったものながら、岩瀬本の存在は貴重である。ただしなお検討の余地が存する事柄もある。例えば三十一丁裏四、五行目の首書は、この一箇所だけ綠色による書き入れである。

愚按、九条家／傳來兼実公／作処、春日野／塩地、五枚継也、

／公久卿傳來神／□九者、飛多／頭板也、是等／之類歟、

この文章は他本に見られない。なかに「公久卿傳來」とあり字体が墨書・朱書に酷似しているから、本文などと同一人物による書き入れと見られ、あるいはこの部分は、単なる首書というよりもいわゆ

る頭注に当たるものかもしれない。とすると他の書き入れと性質が異なるために、区別を付ける意味でこだけ緑書されたのだろうか。可能性の一つではあるうが、推定の域を出ない。

また先にも触れた奥書の「田中殿」とは誰か、あるいは花押の人物（書写者）は何者か、など検討が及ばない部分が多い。書写者について言えば、今出川家、そして右の引用にも見える九条家とも何らかの關係があるうが、これ以上のことを述べ立てる準備がない。また「田中殿」については、恐らくは石清水八幡宮祠官家の田中家の人物であろうかと思うが、これも確証がない。大方の御批正、御教示を願い上げる次第である。

〔注〕

- (1) 『胡琴教録』の原態については早くに萩生徂徠校正本「胡琴教録」の巻末識語に言及があり、本来真名書であったものが仮名に訓み下されたことを指摘している。森下「内閣文庫蔵『胡琴教録』(萩生徂徠校正本、乾坤二冊)について——伝本研究・本文校訂に向けての覚書——」(『国文学攷』第一四七号)参照のこと。
- (2) 山田孝雄氏執筆古典保存会複製『胡琴教録 下』解説による。

——もりした・ようじ、広島大学文学部助手——